

日風園

〈高知県立歴史民俗資料館だより〉

第22号 1997年1月1日

豊臣秀吉と土佐材木

土佐史研究家 広谷 喜十郎

皇太子殿下浩宮さまがまとめられた「『兵庫北関入船納帳』の一考察―問丸を中心にして―」（『交通史研究』）という論文がある。その文安二年（一四四五）の「兵庫北関入船納帳」をみると、安芸郡甲浦、奈半利、安田、先浜（佐喜浜）や香美郡前浜の船舶が兵庫港に出入りしていたことがわかり、船の積載品はすべて林産物である。それに、「安芸文書」によると、永正七年（一五一〇）に安芸郡の畑山氏が材木移出で活躍しているし、治安三年（一〇二三）の「石清水八幡宮文書目録」では、奈半利、羽根、吉良川、佐喜浜の山林で働く柚人がいたことが確認できる。また、土佐材木は室町時代初期に成立した「庭訓往来」にも諸国の名産品と肩をならべて、その名がみとめられるほどである。

天正十四年（一五八六）大関にまで出世した豊臣秀吉は、天下に自己権力の強大さを誇示しようとして、京都東山の地にある方廣寺に大仏殿を建立しようとした。この折、秀吉は国内に良材を求めたのであるが、『太閤記』によると「東山の太閤殿を建立し給ふべき旨、五人の奉行共に被仰にけり（略）かくして、材木を可取国々を記し付けるに第一土佐、第二九州、第三信州木曾、熊野など宜しかるべき極りける」とあり、それに、『長宗我部盛衰記』に「奉行二十人、大工二十人を国々へ遣さる」とあるように、専門家である大工をも同行させていることは注目される。その専門家の眼で、諸国の材木をきびしく吟味しての結果、土佐材木が全国で第一位だというのである。

『元親記』によると、「奈半利の奥成願寺山へ入りて大木を柚取る」とあり、「元親は是大切の公事なれば、疎にて叶ふまじとて子息弥三郎を伴ひ安芸郡奈半利の成願寺山に入て下知せられし」（『長宗我部盛衰記』）とあるように、奈半利（現在は北川村）の成願寺山を中心にして材木の伐採がおこなわれたのであり、この山が土佐のなかでも最も大事なところであったとみえ、元親父子がそろう成願寺山まで来て指揮しているのである。さらに、高岡郡の仁淀川筋で奥山に入り込んで数千本の材木を伐り出している。この土佐の山中で材木を伐り出すために四国や九州からも沢山の柚人が集ってきただという。

それに、諸国から大型船も集めて土佐材木を運送させ、大坂の淀川に着岸させている。それが、諸国の材木にさきがけて最も早く到着したというので、秀吉は大いに喜び、褒美として米二千石を長宗我部元親に届けさせたのである。大仏殿の棟木用の巨木を富士山中に求めて、徳川家康をして運送させているが、この木一本の運送に人夫五万人役、黄金千両を費やしたというから、土佐からの運送費用は莫大な黄金と人役を必要としたことであろう。その後も伏見城の築城の折にも土佐材木がかなり使用されているので、土佐材木の名は天下にあまねく知られるようになったといえる。

また、『南路志』によると、天正九年（一五九一）正月、浦戸港内に入り込んできた九尋の兎鯨を捕獲して、元親は秀吉に献上しているが、さすがの秀吉も「鯨丸ながらの音信物は前代未聞」と大いにおどろき、それに「丸鯨を見る事珍らしき事なれば、侍町人に至るまで町筋へ群集してこれを見物す」（『元親記』）とあるように、大坂の人たちもおどろかせたのである。

なお、土佐材木や鯨が着いた淀川の場合、後に「土佐堀川」と名付けられ、現在もその地名が残されている。

開館5周年記念

秀吉と桃山文化

―後期のみどころ―

野本 亮

平成九年一月六日(月)に展示替えを行い、いよいよ秀吉展も後期に突入です。大好評を博した前期に勝るとも劣らない資料群があなたをお待ちしています。

では、後期の名品の幾つかを構成順にご紹介いたしましょう。

序章

□南北朝・室町 武器武具の名品

戦国時代への導入にあたる本コーナ―必見の資料は、父後醍醐天皇とともに鎌倉幕府打倒に活躍した大塔宮護良親王所用の「大円山形星兜」と「金銅造丸轡太刀」(ともに重文)です。

中世の武器・武具を見る機会はめったにありませんので、じっくり御堪能ください。

第一部

□群雄割拠

前期の「武田信玄配陣図屏風」に代わり、山城や平城、船上での攻防戦を描いた「戦国合戦図屏風」が登場します。典型的な戦国合戦の様子を具体的に理解することができます。

□織田信長の登場

ここでは、後期から「桶狭間合戦配陣図」と「長篠合戦図屏風」が加わり、

内容が一層グレードアップします。

長篠合戦における、織田・徳川連合軍の鉄砲隊が武田騎馬隊を迎撃する場面は、絶対に見逃したくないものです。

□天下人秀吉

天正一一年、信長亡き後織田家筆頭家老の柴田勝家と秀吉は、対立の度を深めていきました。後期より展示する「柴田勝家書状」は、賤ヶ岳合戦の三ヶ月前に養子勝豊に出されたものです。すでに勝豊は秀吉に寝返っていました。それを察知できない勝家の哀れさが伝わってくる資料です。

また「池田恒興(織田信長の乳兄弟美濃大垣城主)画像」は、秀吉の天下取りの陰で犠牲になった武将の悲哀をしみじみと感じさせてくれます。(恒興は羽柴秀次軍に属し、家康の本拠地三河侵攻をはかって失敗、戦死した)

天正一三年に関白、そして豊臣姓を

許された秀吉は、名実ともに天下人になりました。「豊臣秀吉九州攻め陣立書」は、従軍した一番から一番まで二七名の大名の名が見え、秀吉の軍事力の巨大さを知ることができます。天下人の実力といえば、「聚楽第図」も

関白公邸の豪華さを伝えてくれる注目度抜群の資料です。

第二部

このコーナーでは、あまり大きい展示替えはありませんが、後期限定資料として次の資料が登場します。

□南蛮文化

「三巴紋緋羅紗陣羽織」

九鬼家蔵

□茶人の書と肖像

「古田織部画像・自筆書状」

□蒔絵・調度品

「秋草紅葉鹿文蒔絵料紙笥」

□桃山時代の武器武具

「蜀江錦金唐革銀覆輪鞍・鉄鎧」

九鬼家蔵

いずれも名品揃いで、前期以上に華やかになること請け合いです。

第三部

□秀吉の死

貴重な「豊臣秀吉自筆辞世和歌詠草」に代わり、狩野山楽筆の伝承をもつ「秀吉画像」(重要美術品・豊国神社蔵)を展示します。本資料には秀頼の書込みも確認されています。お見逃しなく。

□大坂の陣

前・後期を通じて最大の目玉である門外不出の名品「大坂夏の陣図屏風」の実物がいよいよ展示されます(期間限定の一週間)。

慶長二〇年(一六一五)五月、一五万五千の徳川軍を五万五千の軍勢で迎

撃した豊臣軍との間にくりひろげられた一大合戦の様子を描いたもので、画面には人物だけで五千人以上も描かれています。左隻には敗走する豊臣兵、逃げまどう大坂町民、暴れまわる徳川兵という具合に、合戦の迫力そして悲慘さを克明に描写しています。



大坂夏の陣図屏風

他にも四〇点以上の資料が後期より登場します。前期にご来館された方も、そうでない方も是非ご観覧ください。

特別巡回展

「新発見考古速報展'96」を終えて

岡本 桂典

四国で初めて開催された「新発見考古速報展'96―発掘された日本列島―」が十月六日(日)に終了した。期間中の開館日数(九月一五日から開催)は、一九日間と少なかったが、県内の方はもちろんのこと愛媛県・香川県・徳島県そして遠くは岡山県からバスツアーなどで多くの方にご来館いただくことができた。

「新発見考古速報展」は、文化庁や開催館が主催となり、全国公立埋蔵文化財センター連絡協議会・全国埋蔵文化財法人連絡協議会が共催となって始めた事業で本年度で二年目、日が浅く全国的には十分に知られていない巡回展であるが、期間中の本館の入館者は、七、三三八人であった。

このような歴史関係の巡回展が可能になったのは、歴史系博物館が県内にあることや博物館学芸員という「職人」が徐々に県内に育ち始めたことにあると考えている。

これらの展示される考古資料は、各地方の埋蔵文化財センターから一歩外に出ると美術品として扱われる。今回展示資料は、前会場の群馬県立歴史

博物館から高知県教育委員会文化財保護室の職員が添乗して、四トントラックの美術専用車二台で三日かけて運ばれてきた。考古資料は、非常にもろいものが多い。これらの考古資料五二二点全てが、嚴重な梱包から解かれたのは、一日半後のことであった。それらの美術品が無事であることを確認すると一同「ホッ」としたのであった。細かい点検・確認作業が終了するとすぐに展示が始まるのである。

「新発見考古速報展」は、まさに日本の発掘最前線を知ることのできる展示であった。考古学をめしのタネにしているものでも、初めての展示品には目を見はるものがあった。

北海道の旧石器時代後期の黒曜石の原石や尖頭器類、縄文時代前期の秋田県池内遺跡の文様の彫刻されたクルミ、長野県エリ穴遺跡の縄文時代晩期の女性の全身土版、古墳時代の栃木県富士山古墳の家形埴輪、奈良県笹鉾山古墳の人物埴輪と馬形埴輪、京都府小倉別当町遺跡の飛鳥時代の日本最古の「高志」の線刻のある無文銀銭、平安時代の末の香川県善通寺の香色山一号経塚の

出土遺物、長崎県鷹島海底遺跡の弘安の役の時の元寇船のイカリ石、室町時代から江戸時代にかけての自由都市堺の輸入陶磁器類、そして江戸時代の福岡県の宗玄寺跡の義歯や木製の総義歯など、まさに日本の歴史を「物」が語っているようであった。

このような展示品の中に、人目を引く大きな大阪府狭山池出土の碑があった。鎌倉時代に東大寺の再建に努力した重源の狭山池の改修碑のレプリカである。そこには模型の木樋が展示してあった。この狭山池は、古代における灌漑用の池としては有名で、「記紀」などによれば四世紀に築造されたものとされていた。しかし、この池には六世紀の窯跡があったことがかつて指摘されていた。そうするとこの狭山池は、六世紀以降の築造となる。ところが昨年狭山池で発見されたこのコウヤマキ木樋の伐採された年代が、年輪測定法で六六一年ということが明らかにになり、七世紀に築造されたことが明らかにになった。まさに日本の歴史がかきかえられているのを感じ取った人も多いと思う。そこから派生する問題は大きいのだが。

さて、博物館での今回のような巡回展や企画展などの事業は、すべて学芸員が主体に行っているように一般には理解されている。大学から依頼される

博物館実習生や博物館に勤務する職員にもそういう認識しかもっていない人もいるということも近年よく耳にするようになった。

高知県立歴史民俗資料館は、学芸課と事業課(総務課を兼務する)両輪で運営されている。その一方でかけると車は、どちらかに傾いてしまうのである。今回の速報展は、歴史館運営の方法を一方で試されたものでもあった。本年度の「新発見考古速報展'96」の開催の実行委員は館長・学芸員の専門職で構成されているが、本館は学芸員一人と事業課一人の職員の構成をとった。通常、他館の博物館では総務の協力をあまり得られないと聞いている。その点、本館は両輪の如く運営できた。初めての三階常設展示室を展示替えしての巡回展が何とか実施できたのも全職員の協力があつたからである。

また、これらの考古資料を展示できたのは、全国各地で3Kと呼ばれる発掘調査に従事されている調査員や作業員の方々の努力のおかげでもあることも決して忘れてはならない。

来年度以降の「新発見考古速報展」の開催会場は決まっていないが、また高知会場での「新発見考古速報展」を期待したい。

ひと8

溝渕博彦さん



溝渕さんは高知工業高校定時制で教鞭をとりながら、高知県文化財保護審議会委員として、毎年たくさんさんの建造物調査をなさっています。当館の資料調査員としてお世話になってきましたが、昨年から史跡巡りの講師もお願いし、民家や町並みについてユーモアたっぷりに楽しく教えていただいています。溝渕さんに町並みや民家の魅力などをお聞きしました。

はじめての町並み調査

僕の建築に対するスタートラインは高校時代に歴史や美術が好きだったことからはじまります。建築をやりたいというのは、どちらかというと芸術的なことがしたいという気持ちからでしたが、その上に、社会に何らかの形で残ることと理数系のこともしたかったのです、それらを併せて出来ると考えて志したのです。文化財を調査するようになったきっかけは、安芸工業高校に赴任したときに三八名の生徒を連れて実習として土居郭中の測量をはじめたことでした。武家屋敷の平面図や立面図などを実測し、報告書を作製しました。それは安

芸市の初期のまちづくり計画などにも活用されました。

土居郭中には戦国時代に遡る歴史があります。僕もまだ二〇代だったから文化財といってもわからなかったし、生徒が実測したのも寸法的にはそんなに当てるものではなかった。けれど、生徒に対しては、そういうものを大事にするという意識の教育にはなつたと思う。僕の方もそこから文化財に関わっていくようになったわけです。

古い家や町並みの魅力

土居郭中には戦国時代の安芸国虎の城跡があり、江戸時代に入ってから武家屋敷の地割りが残っていて、幕末の武家屋敷が数棟あります。そこら辺に歴史の流れが見えて面白いんです。

当時の細い道が残っていて、そこを歩いていると車道の脇を通る歩道とは違うものが感じられるんですね。それが空間の魅力になっている。寸法も違うし、路面の高低の強弱も割合少なく、側溝の石からはじまって路面や竹垣など、自然の物を手で組み上げていて、今風の素材が入っていない。それ

で人の心に優しいのかな。雨の日には竹垣や路面が濡れてしっとりとした感じが醸し出されてなかなかいいんですよ。

古い家や町並みのもつ雰囲気浸っていると、タイムスリップして歴史の中に入りこんでいくように感じる。それに古い家には面白いデザインがたくさん残っていて、それらを自分の感性にとりこみ、現在のデザインに生かしていくことができる。そういうところも古い家や町並みの大きな魅力です。

古いものが残っている地域を見つめ、新しいものを造りあげていく感性を養う。それが大事だと思いますね。

高知県の特色ある町並みや民家

高知県は台風常襲地域で、海岸部は白蟻が活動する適度な湿度があるので、高知県の建物で二〇〇年を越すものはあまりないんです。だから二〇〇年を越す民家は相当貴重になってくる。その中で高知県の伝統的建造物という

と、土佐漆喰と水切り瓦、それに切妻屋根のちよつと軒の低い建物というのが代表的なものひとつでしょう。それは高知県の厳しい気候風土の中から生まれた個人的知恵です。そういった民家はまだまだ残っています。また町並みとして残っているのが室戸市吉良川町です。



安芸市土居廊中の町並み

厳しい風土に耐えて残った民家や町並みというのは、若い頃から苦労して生きてきた人間にたとえられると思う。民家や町並みの後ろに、そんな高知ならではの特色を見ることが出来るんです。

昨年と一昨年に高知県下で近代和風建築の調査が実施され、これに参加して多くの印象深い民家を見ることができました。中でも香北町の三谷家住宅と土佐清水市の吉福家住宅には惹きつけられました。三谷家住宅は山の民家で、土佐漆喰と水切り瓦の商家と、農家の土間の形態が入っていますし、吉福家住宅は武家屋敷と農家の土間、網元漁家という三つの形態が合体しています。そのような合体は江戸時代にはあり得なかったわけですが、明治に

なって身分制度を越えて起こっている。洋風と和風の合体とは違いますが、やはり時代を反映しているのですね。三谷家は山の民家で吉福家は海の民家ということで、両者を比較していくと高知県の海と山の暮らしの違いもわかってきます。

町並みをどう生かすか

高知県では吉良川町の他、田野町や奈半利町でも町並み保存の動きが出てきています。

古い町並みは、ただ残すというだけでなく、現在の町づくりにそれを活用することが大事だと思うのです。どこを切っても金太郎アメのように東京と似た町ではつまらない。町にはそれぞれ歴史や個性の違いがあるわけですから



吉良川の浜地区町並み

からそれに応じた町づくりをすると、より面白い町になっていくと思うのです。古い町並みがそのまま商店街だったら、そこを訪れるお客さんはひと味違った雰囲気を感じることができるとしよう。

また、そこには子どもや若者、お年寄りなどが住むんだから、その人たちにも住み心地の良い町にするべきだと思います。そのためには、建物の外は雰囲気大切に残しつつも、建物の中を現在の暮らしや商売にあつた形で修復していくということも必要になると思います。

暮らしやすい建物は、例えば冬には日照が十分入り、夏場には通風が良くないといけない。こうした暮らしやすさについての、過去から蓄積されてきた職人の技術や知恵を今の町づくりの中にそそぎ込み、数世紀前から伝えられてきたデザインを今の町づくりに生かしていく。さらに今の素材とも合体させてより快適な町づくりをしていくことができればと思います。特に、技術を伝えていく方向で動かないと、かつて蓄積された技術がゼロになってしまいます。次の時代の新しい建築が創造されるためには技術が継承されることが重要になってきます。

各地で古い町並みが重要伝統的建造物群保存地区として選定され、整備さ

れています。日本では文化財が広く親しまれているとは必ずしも言えない状況ですが、欧米では文化財的なものに若い人が集まる傾向があります。というのも、歴史を知って何かを感じ取り、新しいものを造り上げていく、それが文化を造りあげていくことに繋がっているようですね。ただ勉強するだけじゃなくてそこには遊びの要素が入ってくる。同様に日本でも、もつと楽しみながら文化財からいろんなものを吸収して、感性や力量を高めていくという状況をつくり出していきたいのです。

このシリーズは、できるだけわかりやすく民家や町並みを説明し、一般の方に理解していただく場をつくらうということから企画したのですが、参加者には四国四県で町並みが整備されている状況を見てもらって、自分たちの町並みのきれいなところや汚いところを見ることができると目を養っていただくと考えています。

町並みを見るポイントは、その歴史を知って、住民の昔と今を比較することです。それから個々の建物の特徴をよく見て、建物の個性を見極めることです。それによって町並みの魅力が倍増することでしょう。

近代化遺産調査がスタート

僕が執筆陣に加わっていた高知新聞の「土佐の民家」の連載が終了しましたが、これに引き続いて来年から「近代化遺産」の連載がスタートする予定です。近代化に貢献した構築物を調査して、その成果を紹介していきます。

歴民の史跡巡り

歴民の史跡巡りには、昨年「四国村をたずねて」の講師として参加しまし

た。そして今年から「町並みウォッチング」のシリーズを始めました。

考えています。(文責 中村)

II 竹村家資料紹介 II

木屋の看板きや

高松 恵

「木屋」に関する資料は、近世から近代にわたる資料で、高知県立美術館に保管されている絵画類(一二点)以外は、現在全て当館に保管されており、それらの資料は現在調査中である。

竹村家、屋号「木屋」は、明和九(一七七二)年高知城下町菜園場町において金物商を始めとし、次々に国産砂糖大問屋・ブラジル移民事業等に着手してきた商家である。

さて、今回それらの寄託資料の中から店の目印となる木屋看板五点を各々写真とともに紹介していきたい。

御國砂糖賣捌所

①御國砂糖賣捌所看板

〈縦154、横30.8、厚さ2.2(cm)〉



②萬金物屋商品看板
〈縦49.5、横70、厚さ2.5(cm)〉



③大工道具商品看板
〈縦45、横60、厚さ2.5(cm)〉



④萬金物商品看板
〈縦45、横60.3、厚さ2.5(cm)〉



⑤大工道具(墨壺)看板
(全長95cm)

看板であり、年代としては大正時代のものと推測される。②③にそれぞれ見られる商標政・④は、大阪にある矢倉鑄造所(製造販売所)・早川徳次郎商店(和洋金物商)で、木屋と大正時代取引していた店である。最後に墨壺の形を模した⑤の看板についてだが、今まで紹介してきた四枚の看板とは飾り方が異なり店内で床上直に置かれていたものである。そして、この看板の姿は、店で何を売っているのかを万人に解かせることのできる大型模型になっている。又、この墨壺看板以外にも大根(諸國種物も売っていた)の形を模した大型看板も飾っていたらしいが、今は残っておらず残念ながら見ることはできない。そして、木屋には商品陳列所が主屋(実際に売買をしていた所)の他に存在していたらしくこれら「木屋」看板が、どちら側の店に飾られていたのかは今のところ解っておらず、今後調査していく中での一つの課題でもある。又、高知市民図書館にある藩政期の「高知町商家看板下書き」の中にも木屋に関する下絵はなく、木屋看板はこの五点だけが現時点確認できている資料である。そして、これら「木屋」看板は、世上ともに多様化していく看板形状の一過程を見いださせる資料であるとともに人々が残した生活形態を垣間見せてくれる資料である。

左に掲載している看板は、五点とも木製であるが、形態別に見るとA型板状をなす看板(①②③④)と大工道具のようなそのものを模したB型看板(⑤)とに分けることができる。更に、A型という形上での共通性をもつこれら四枚の看板も、その他の条件によりさらに異なる形態へと多様化している。おおよそ看板は、多種多様な条件(時代・商い物・場所等)により材料・形態がそれぞれ異なってくるようで、これら木屋看板五点にも同様の事が言えるよう。木屋(二代目)は、文化四(一八〇七)年田村屋に加わり御國砂糖賣捌所に指定されており、①の看板はその事を裏付ける要因の一つになる看板である。文字通り「御國砂糖賣捌所

(處)」と両面に彫られ墨が入れられており、往来の人々がどちら側からも見ることの出来る看板となっている。又、この看板には釣り下げするための金具が無く、板の周囲には五、六幅程度の地色の違いが見られる点や片面の下部に土がついて残っている。このことから一般的に見られる釣り具で店の軒に下げていた下看板とは異なり、軒の下で何かの枠組みにはめ込み、目につくように道路に向かって直角に飾られていた看板だったと考えられる。明治二〇年出版の『南陽高知商工便覧』に木屋広告も載せられているが店先風景ではなく木屋橋(現:菜園場町から崎町にかかる橋)を使っており確かめる事は出来なかった。又、〇〇賣捌所と書かれた商店の看板が同書に何軒か見られるが全て軒先などに釣り下げられている看板であった。続いて明治以降よく見られる②③④の看板は、壁にそって飾られる木屋の取り扱い商品

II 寄贈資料紹介 II

松木幾八氏コレクション

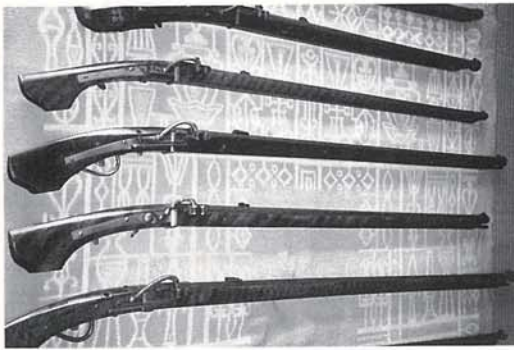
野本 亮

戦国時代、勝敗を左右する新兵器であった火縄銃も、合戦のなくなった江戸時代には、武士が一射必中の技を磨くことにより、心身の鍛練をはかる武道(砲術)として用いられることが多くなる。また、庶民においても狩猟用に使用されるなど、その性格は一変した。

ところで、意外なことに幕末期の土佐は阿波とならんで鉄砲の生産地であった。「南路誌」には山内一豊が土佐に入国する際、鉄砲鍛冶国友新四郎を同伴したことや、幕末(文化元年一八〇四)には、獵銃六六七挺、藩庁所蔵の足軽銃が一四五〇挺など実に多くの鉄砲があったことが記されている。

橋田庫欣氏(昭和四六年)と川越重昌氏(昭和五四年)は、県の銃砲刀剣登録台帳等を用いて県内の古銃を丹念に調査され、幕末期の土佐の鉄砲鍛冶の実態を克明に描き出している。しかし、良質の鉄を産しない土佐において、何故かくも多くの鉄砲を生産し所有することができたのか、その答えは明確にはされていない。

さて、今回寄贈された故松木幾八氏



所蔵の火縄銃は、極めて保存状態の良い名品揃いで、調査にご同行いただいた果銃砲刀剣審査委員山本俊夫先生によると、銃の形式からみて江戸後期に製作されたものであるとのご教示を得た。これらの銃の大半は摂州(堺)・江州(国友)・阿波・土佐の鉄砲鍛冶によって作られたもので、その特色には興味深いものがある。特に土佐鍛冶の製作したものについては、今後とも山本先生のご指導のもと、じっくり調査をしてゆきたいと考えている。

ユア・ボイス

今回は9、10月に行われた「新発見考古速報展」のアンケートから。

「さすが、新発見考古速報展」の名前の通りめずらしい物がいっぱいでした。高松から尋ねまわって(バスの中で、駅の案内所で)でも来たかがありました。(香川県)

「歴史で学んだものが実際に見れてすぐよかったです。またやってほしい。」(南国市、女性、13才)

「昔の人が持っていた技術力に圧倒された。意外に豊かな暮らしであったことを知った。できれば毎年見たい。」(香川県観音寺市、女性、22才)

「常設展を移動してまでできたことはすごいと思う。これからもこのような

すばらしい巡回展が来たら嬉しい。」(高知市、女性、23才)

「弥生時代のフォークやスプーン、ジョッキは今とほとんどかわらないことなどおどろきでした。」(高知市、女性、43才)

「もう少し歴史の背景が文字で説明されてればもっと古代への想像もふくらんだような気がする。」(高知市、男性、28才)

「人間の心は何千年もかわらぬものが流れていると思いました。はにわの馬のたてがみがくくってあったのを見て、生き物を愛する心は同じだと涙が出ました。これからも物を通して心を見ていきたいと思えます。」(徳島県海南町、女性、58才)

たくさんアンケートご協力いただき有難うございました。



歴民スポット ① 工作室

資料は搬入口から館に入り、慎重に梱包を解いて、燻蒸されます。クリーニング、補修の必要な資料はここできれいにします。そして、収蔵、展示される前に資料カードを作成します。資料名称、時代、出土地や使用地、大きさ、材質などを調べてカードへ記入していきます。また、読みづらい文字はここにある赤外線カメラをとおして解読することもあります。(曾我)

1～3月の催し物

〔特別巡回展〕

平成9年 1.7～1.26	秀吉と桃山文化(後期) -大阪城天守閣名品展-	資料の展示替えを行ない後期をスタートします。秀吉が「おね」に出した書状や「聚楽第圖」など後期のみ展示される資料が約40点ほどあります。ご期待下さい。
------------------	----------------------------	--

〔講座〕 午後2時～4時 当日受付 聴講無料 定員100名まで。

3. 1(土)	いざなぎ流・神々の世界	梅野 光興 (当館学芸員)
---------	-------------	---------------

〔子ども歴史教室〕 *電話にてお申込下さい。 親子連れ可。秀吉展をみようは当日受付。先着順。

1. 11(土)・1.25(土)	秀吉展をみよう 定員30名 10:30～	教科書にも出てくる資料を中心に解説します。特に秀吉と長宗我部元親の関係をわかりやすく説明します。
2. 8(土)	火おこし* 定員20名 10:00～11:00	今では、簡単におこせる火—古代の人の火おこしの知恵に挑戦してみよう。
3. 8(土)	親子史跡巡り・元親の足跡* 定員30名	当館を見学したのち浦戸城跡や戸ノ本古戦場など長宗我部元親ゆかりの地を訪ねます。

〔史跡めぐり〕 申込書にて受付 参加費必要 申込み多数の場合は抽選。

3. 15(土)	藩政期の中村	一昨年の「一条氏の足跡をたどる」に続き、今回は中村市周辺の近世の史跡を訪ねます。
----------	--------	--

〔臨時休館のお知らせ〕

特別巡回展「秀吉と桃山文化」の資料搬出に伴い下記の日を臨時休館と致します。

臨時休館日 平成9年1月28日～2月2日



秀吉と桃山文化
-大阪城天守閣名品展図録-

大阪城天守閣の誇る名品約250点を特別展のストーリーに沿って全点掲載。巻末には丁寧な解説付き。オールカラーA4版250頁の超デラックス版。ご期待ください。

〈地域展別冊〉

地域展示資料(長宗我部・山内氏関係)33点を全点掲載。オールカラーA4版37頁。
※セット販売ですので別売りはいたしません。



平成8年12月25日	編集・発行	高知県立歴史民俗資料館
〒783南国市岡豊町八幡1099-1	TEL	0888(62)2211
	FAX	0888(62)2110
開館時間	午前9時～午後5時	(入館は午後4時30分まで)
休館日	毎週月曜日(祝日及び振替休日)	あたる場合は火曜日(12月28日)・1月4日
入館料	通常期(常設展)大人(18才以上)400円	団体(20人以上)320円
	高校生以下は無料	
	療育手帳・身体障害者(1・2級)手帳・障害者手帳(1・3級)所持者とその介護者(1名)、高知県長寿手帳所持者は無料	
	印刷・川北印刷株式会社	

新発見考古速報展が無事に終わりました。全員ホッとしています。(岡本) 子ども歴史教室で餅搗きをしました。食物が手軽に買える現代ですが、子ども達には自分で挽いた黄粉をつけた餅が格別おいしかったです。(中村)

月日	出来事
平成8年 十月六日	「新発見考古速報展96」閉幕
十月八日	展示入替のため臨時休館
十月十五日	史跡巡り「窪川町興津の古式神事」
十月二十六日	史跡巡り町並みウォーキング「徳島県勝野」
十一月九日	子ども歴史教室「白をひこう」
十一月二十九日	「からくり200年」閉幕
十二月二日	「からくり200年」閉幕
十二月三日	展示入替のため臨時休館
十二月七日	「秀吉と桃山文化」開幕
十二月十一日	子ども歴史教室「秀吉展をみよう」
十二月二十二日	子ども歴史教室「秀吉展をみよう」

〔歴史館日録〕